

新たなる一步を

(さらば銀行、さらば借入)

- 一、深くこの生を愛すべし
- 二、省みて己を知るべし
- 三、学芸を以って性を養うべし
- 四、日々新面目あるべし

上の言葉は大正の昔、会津八一（作家でもあり大学の講師でもあった）が、自家に住ませた学生達に与えた心得で「秋草堂学規（しゅうそうどうがっき）」と呼ばれているものである。私の部屋に貼り付けて既に2年近くになるが、最近とみにこの言葉が目染みようになってきた。未熟だが洋々たる前途のある学生に与えた言葉はあるが、噛みしめれば噛みしめるほど肝に命じたい言葉のように感じられてくる。私のような50歳を過ぎた人間が何を今更と云いたいところだが、この言葉のように生きたいと思う気持ちが沸々と湧いてくる。そうなのだ、歳を重ねても、頭髪が白くなっても、あるいは額に皺が刻まれても、ただそれだけで得られるものはほんの少しなのだ。可能な限り日々新面目であるためには、深くこの生を愛すると同時に己を知り研鑽を重ねて性を養う他にないに違いない。

私がかつて席を置いた銀行業界は、経営環境が激変する中で現在苦しみ喘いでいる。かつての同僚達にしても多くは苦しみ悩んでいるようだ。最近、退職前一緒に仕事をしていた当時の部下が二人ほど銀行を去った。若くて優秀な彼らが何故銀行を辞めたのかは、おそらく銀行という組織にとって深刻な問題であろう。彼らの自発的退職は若い行員達に動揺を与える。動揺は津波のように増幅されて組織全体に瞬く間に伝わる。そしておそらく溜息がもれ、組織内の志気が低下する。

彼らに辞めた理由を尋ねると、それは「ここにも仕方ない」と表現できるようなものであった。ここにも仕方ない つまりは企業が見捨てられたのだ。将来への希望や展望が見えなくなった時、人を金銭だけで繋ぎ止めるのは難しい。冒頭の会津八一の言葉には人生や人間性に対する深い情愛が感じられるが、そうした愛や情熱があってこそ私達は苦難に立ち向かえるのではないだろうか。青臭い書生論に聞こえるだろうが、これは何も大企業だけの問題ではない。

銀行以上に苦しんでいる中小企業は、おそらく

数えきれない。日本国全体が陶酔的熱狂の近くにいたあの当時、「借りて下さい」と擦り寄ってきた銀行の囁きに乗って、土地や株に多額の借入金を注ぎ込んでしまった企業は相当数に昇る。もちろん借りた方に山っ気が無かったと云えば嘘になるが、取得した資産が暴落してしまっただけで資産購入の借入金が返済できなくなるのは理の当然だ。それを承知していながら「担保が足りませんのでこれ以上貸せません」「担保と保証人を追加して下さい」等とやられては、当事者ならずとも怒りが込み上げ銀行に恨みつらみを云いたくなるというものだ。一方で、巨額の借入金返済を免除して貰う（銀行の債権放棄を受ける）大手企業が少なからずあることを思うと、コツコツと返済して行く気力が萎えてくるのも無理はない。どうすればいいと云うのだろうか。

中小企業経営者が最も釈然としないのは、本業で何とか収益を上げ少しずつ返済を続けて頑張っている中小企業への銀行の締め付けが厳しいと云う点であろう。それが銀行不信となって銀行へも撥ね返っているが、銀行はそれを知ってか知らずか視線はあらぬ方向を向いているように見える。こんなことでは将来の貸付先を失って更に困難に陥るに違いないと心配するのは私だけでは無いだろう。

多くの経営者が銀行に期待するのは、どうしたら現在の過重借入金という困難を脱け出して行けるかの方法と道筋を示してくれることであるが、それは無い物ねだりに近い。だから銀行離れを加速させている優良企業を見做って、中小企業経営者も「いずれ無借金企業になって銀行が頭を下げてくるような企業になるぞ」との夢と目標を持って歩んで行く必要がある。例え今はそれにほど遠い状態だとしてもだ。

あと2ヵ月もしないで2000年が到来する。それは単に時間の経過に過ぎないが、気持の持ちようとしてはそれに止まらない大きな契機にすべきと思う。時代が変わっても、経済環境が激変しても、人の心の基底に有るものは変らない。新しい千年紀を真近に迎えて、いつまでも後ろを向いていても仕方ない。銀行も、そして大企業でさえ後ろ向きの企業は滅びるばかりだ。時には秋草堂学規を思い出しながら、この暗渠から新たなる一步を踏み出そう。